

平成17年度教師海外研修（派遣国：ベトナム）実践報告書

八街市立八街南中学校
鈴木 修

タイトル：発展途上国の実態と日本のODA

実践教科：社会科（時間数：1年3クラス×2時間、2年3クラス×2時間）

対象生徒・学年：1・2年

対象人数：各35人

カリキュラム案

(1)実践の目的

国際化が叫ばれている昨今であるが、その関心の目は先進国である英語圏に向けられ、たとえば小学校の総合的な学習で扱っている国際理解教育でも、中学校から始まる英語教育の事前学習にすり替えられている傾向がある。

世界の大多数の国は発展途上国であり、貧困を起因として起こる諸問題、すなわち乳幼児の死亡率の高さ、公衆衛生の不備、医療機関や教育機関の整備の遅れ、伸び悩む就学率や識字率、環境問題等が山積している。これらの問題を同じ地球人の問題としてとらえ、解決の道筋を考えていく子どもを育てていくことこそ国際理解教育のめざすものであると考える。

今回の研修で訪問したベトナムを取り扱うにあたり、様々な課題を抱える村に入り、直接関わりを持ちながらその経済的・文化的な発展に寄与している日本人の存在とその活動の一端を知らせることにより、国際理解の一助としたい。

- ・訪問したベトナムについて、映像をとおして生徒に伝える中で、今後発展していく可能性をもつベトナムに興味を持てるようにする。
- ・世界の多くの国が抱える貧困による問題点と、その解決のための努力と援助について考えさせる。
- ・JICAが行っている援助について、人的な側面から具体的に紹介する中で、国際社会に生きる日本人としてのあり方について考えさせる。

(2)授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 限目（事前学習） ベトナムとはどんな国か	・ベトナムの場所を地図で確認し、生活のようすについて想像させる。 ・ベトナムについての質問を自由に出しあい、帰国後の授業の資料とする。	・ベトナムの地図 ・ベトナムの学用品
2 限目 ベトナムについて 知ろう	・クイズをとおしてベトナムに興味を持たせる。 ・ベトナム独自の雑貨（ダッカウの羽根・バイク用マスク、手袋、将棋、ノートなど）に触れ、その生活を想像させる。 ・映像をとおしてベトナムの人々の生活を想像させる。 ・孤児院、障害児施設、チルドレンズパレス等を紹介し、日本とのちがいを考えさせる。	・パワーポイント「ベトナムクイズ」「ベトナムの人々」 ・ベトナムについての質問一覧 ・ベトナムの地図、国旗 ・ベトナムで収集

		した写真、通貨、学用品、雑貨等
3 限目 発展途上国の課題とODA	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経済が発展途上で、第一次産業中心の国が抱える問題点を話し合う。 ・ 貧困が、人々の生活の中でどのように影響するのかを話し合う。 ・ ODA について説明し、どんな支援をしたらいいのか話し合わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児期の死亡率の資料 ・ 「貧困の輪」 ・ 「世界がもし 100 人の村だったら」 ・ ベトナムで収集した写真
4 限目 青年海外協力隊とセーブ・ザ・チルドレン	<ul style="list-style-type: none"> ・ ベトナムで出会った 3 人の日本人の活動を紹介し、日本の発展途上国へのあるべき支援の方法について考えさせる。 ・ 発展途上国の現状をふまえ、自身の生活を振り返らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイント「ベトナムで出会った 3 人の日本人」

使用する教材

- ・ ベトナムの地図、国旗、自作パワーポイント、自作ワークシート
- ・ 研修中撮影した写真・ビデオ（パワーポイントの中で使用）
- ・ 研修中に収集した学用品、通貨、雑貨

授業内容

1 限目 ベトナムとはどんな国か

ベトナムについての国当てクイズを使い、ベトナムに対する興味を引き出す。ベトナムについて知りたいことを記入（事後の授業の資料とする）。

2 限目 ベトナムについて知ろう

パワーポイント「ベトナムクイズ」による興味付け。同じく「ベトナムの人々」によるベトナムの社会、様々な施設、子どもたちのようす、町と農村の対比等を紹介。事前学習における疑問点の理解。質疑応答。

3 限目 発展途上国の課題とODA

ベトナムの映像をとおして、発展途上国の現状と解決すべき課題を明確にする。貧困の輪を示し、その輪からの脱却をめざす取り組みや、そのために先進諸国が行っている援助を紹介。

4 限目 青年海外協力隊とセーブ・ザ・チルドレン

青年海外協力隊の戸田さん、許勢さん、セーブ・ザ・チルドレンの三木さんの具体的活動を紹介する中で、あるべき援助の方法について考えさせる。

生徒の反応、評価

1 限目 ベトナムとはどんな国か

ベトナムという予備知識のない国に対し、生徒は様々に想像をし、それらの疑問に応える方向で事後の授業を組み立てるよう計画した。しかし、質問の多くは自分自身の生活との比較が多かったため、むしろ自分たちの生活感覚では異質と感じる事象も多く紹介し、興味を持たせるよう意図した。おもな質問としては、給食・授業時間数・教科の内容・遊び・さかんなスポーツ・ゲーム・部活動・制服・世界遺産について等。

2 限目 ベトナムについて知ろう

パワーポイントを使用し、ほぼ 100 枚程度の写真を紹介した。内容はベトナムの「交通事情」「学校」「子ども」「市場」「訪問した施設」「食べ物」「服」「町のようす」で、授業後の感想の中で、何に興味を持つかに注目した。町にあふれるバイク、ダイオキシン被災の施設、孤児院、物価、食べ物、アオザイ等の感想が多かった。

- ・ベトナムというと大きな町なんかがなくて林や田んぼばかりの国だと思っていたけど、大きな町があって、バイクの数がすごかった。考えられないことやびっくりすることばかりだった。
- ・枯れ葉剤の影響で、子どもが不自由な体になってしまうことがとてもひどい。戦争が終わってもまだ苦しむ人がたくさんいることを知った。
- ・国によっていろいろなことが違うので、他の国のことも調べてみたい。

3 限目 発展途上国の課題と ODA

発展途上国の現状を子どもの命に焦点化して考えさせた。

- ・世界の 90 % が発展途上国だとびっくりした。頑張してほしい。
- ・多くの赤ちゃんが、大人になる前に死んでしまうのはかわいそうすぎる。
- ・日本はすごく恵まれていることを感じました。日本に生まれてよかった。
- ・世界ではとてもたくさんの課題があり、自分たちも何かできることがあったらやらないといけないなと思いました。

4 限目 青年海外協力隊とセーブ・ザ・チルドレン

- ・たくさんの子供が貧しい中で生きていることを知ってたいへんだなあと思った。その反面そういう国を救おうとする団体があることを知ったので、これからは力になれることがあったらできる限り協力したいなあと思った。
- ・ベトナムを援助している人、すごく偉いと思った。もっとたくさんの方が援助して、もっとたくさんの方が助かってほしい。
- ・青年海外協力隊の人たちはすごいなあと思いました。お金の援助だけでなく、こういう活動がもっと必要なんだと思いました。
- ・ODA で日本は 1 番お金を出しているけど、お金だけでなく、そこに住んでいる人が住みやすい環境を作ることが必要だと思いました。

授業者の所感・反省点

はじめの授業で数多くの写真を準備したが、ベトナムに興味を持たせるために、日本ではあり得ないめずらしい風景や事物をそろえすぎ、訴えたい内容が薄まってしまった感がある。

世界の国々の大多数が発展途上国であることさえ知らない生徒の実態からみれば、「自分たちは恵まれている」「貧困で苦しむ国の人にはかわいそう」といった感想が多いのもやむを得ないし、大切な感想だと思う。しかし、驚きと同情を越えた先に、よりグローバルなものの考え方を育てていくことが大切である。先進国としての日本の支援のあり方や発展途上国との関係性を思考す

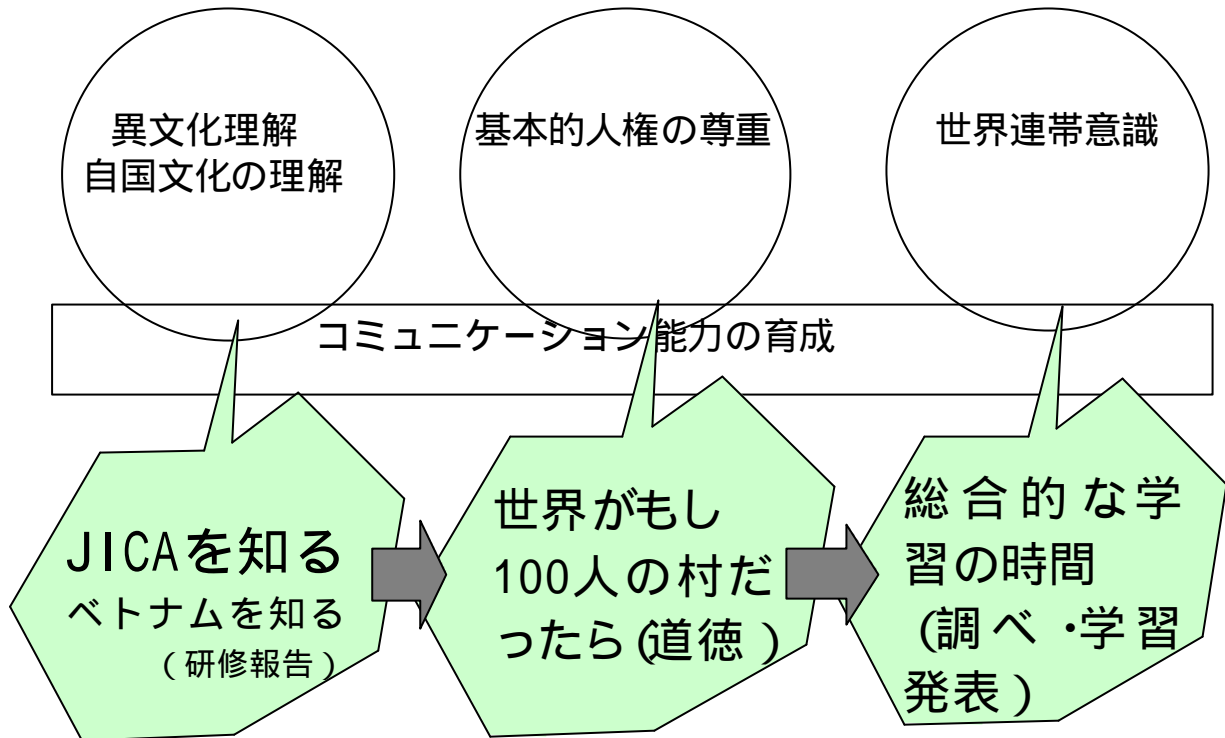
る教材の開発が必要である。

平成 17 年度教師海外研修（派遣国：ベトナム）実践報告書

埼玉県加須市立花崎北小学校
梅澤 祐一

実践事例の概略（6年生3クラス77名）

国際理解教育の3本柱と実践内容



実践事例

(1) 「JICAを知る・ベトナムを知る」(ベトナム研修報告)



9月最初の「総合的な学習」の時間(6年生3クラス77

名対

象)

教師海外研修で見たことを写真スライドにして説明。
ベトナムと日本の違いと共通していることにポイントを当てた。

「JICA」の活躍とそのすばらしさ。

ベトナムという国があるということ。

子どもも大人も幸せに暮らしている国であるということ。

工業や教育などでは、日本がお手本になっていること。

町から離れた農村部では、豊かな生活ができていないこと。

また親が赤ちゃんの育て方をよく知らないことが原因で、栄養不良や死んでしまふ赤ちゃんや子どもが日本より多いこと。

学校の建物作りや先生の教え方や教科書作りを、JICA が応援していること。

赤ちゃんの育て方や作物の作り方を、JICA や NGO が教えてあげていること。

ここでのねらいは3点。

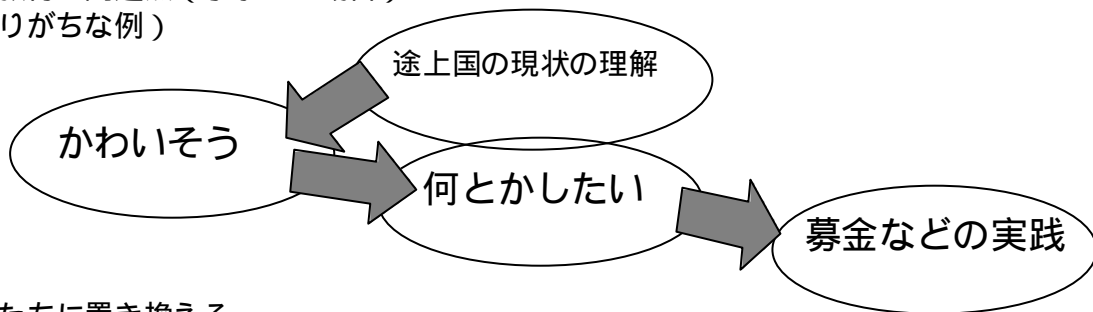
ベトナムという国の異文化理解

JICA が支援していることへの自国への誇り

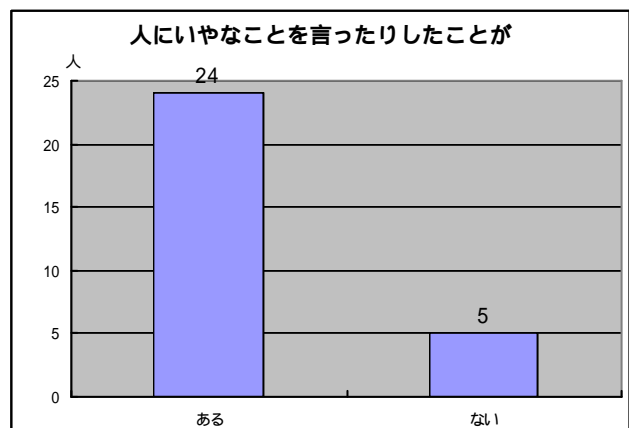
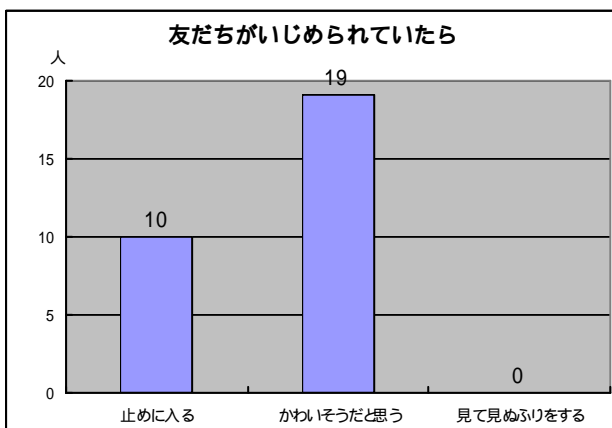
外国と日本のつながりへの興味関心を高める

(2) 世界がもし100人の村だったら（世界の人々と共に生きる）

開発教育の問題点（小学生の場合）
（ありがちな例）



自分たちに置き換える



（グラフは、本校6年のある1クラスの人権に関するアンケート結果より抜粋）

たいていの子は、途上国の現状を理解すれば、「かわいそう」と思うし「何とかしてあげられないのか」と思う。自分にできることと問えば「募金」程度の実践しかできないのが発達段階からして当然である。

しかし、世界の人を助け共生していきたいと、ごく当たり前に願う子どもたちも、足下の人

間関係を見直してみると、同じクラスメイトともしっかりと共生しているかどうかはあやしい。上のグラフは、それを物語る。

そこで、学級活動と道徳を抱き合わせ、自己的人権感覚を見つめ直し、その上で世界の人々と共に生きるために自分に足りないことを深く考えさせる授業を実践した。

道徳の実践（6年生3クラス、各クラス実施）

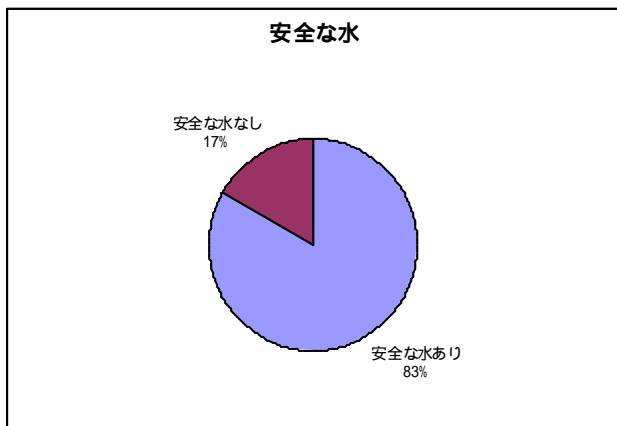
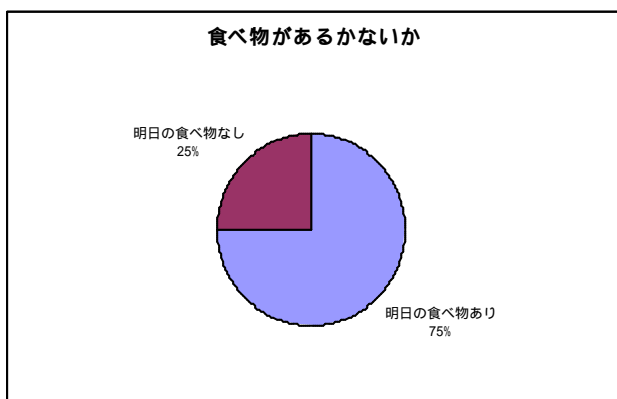
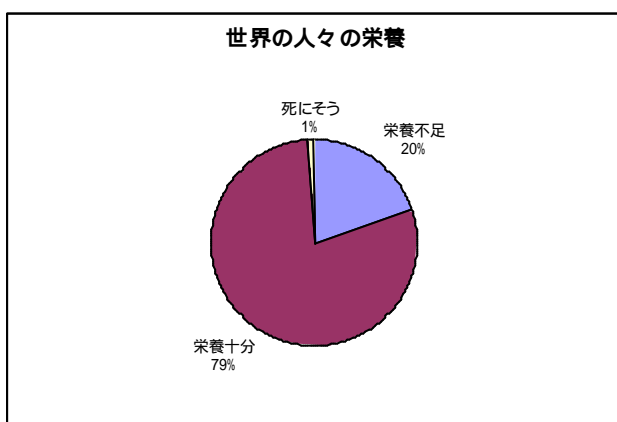
「世界の人々と共に生きる」 ～『世界がもし100人の村だったら』～著者 池田香代子(編)
マガジンハウス(編)～より

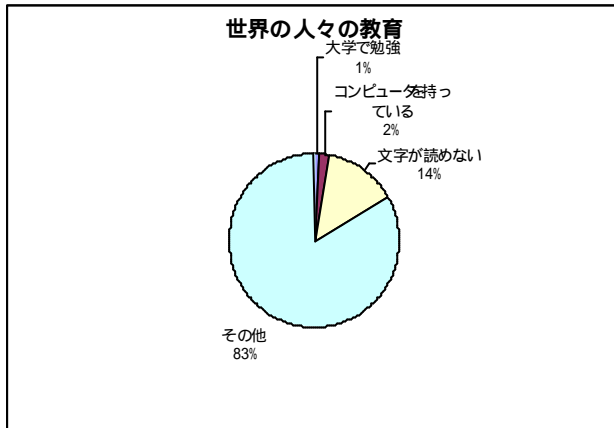
100人の村の内容を、グラフと写真で世界の現状を理解していった。

子どもたちは世界が実は貧しいことに気づいた。

その貧しさの原因を考えていくと「貧困」「教育」「環境」「戦争」が原因であることに気づいた。

この学習では、「助ければいい」「分けてあげればいい」「教えてあげればいい」という結論で終わった。





ここでのねらいは2点。

世界の実情を知ること。

解決は容易いと思い、自分は解決できる人間だと錯覚すること。

学級活動徳の実践（6年生3クラス、各クラス実施）

「世界の人々と共に生きる」 ～ 『世界がもし100人の村だったら』より～

100人の村カードを40人用に作り直して、シミュレーションをした。

貧しいグループと裕福なグループに分かれると、学級活動の「助ければいい」「分けてあげればいい」「教えてあげればいい」が連呼された。

世界の人々と共に生きられるという感覚をもった子に、学級の人権アンケートのグラフを提示した。

子どもたちは、下を向き無言となった。

本当に世界の人々と共に生きていける自信があるのか問うと、さらに無言となった。

世界の人々と共に生きるために、自分に足りないところを考えさせ、文章にさせた。

この授業では、子どもたちの人権感覚が至らない点と、世界の人々と共に生きることの難しさを気づかせることができたと思う。

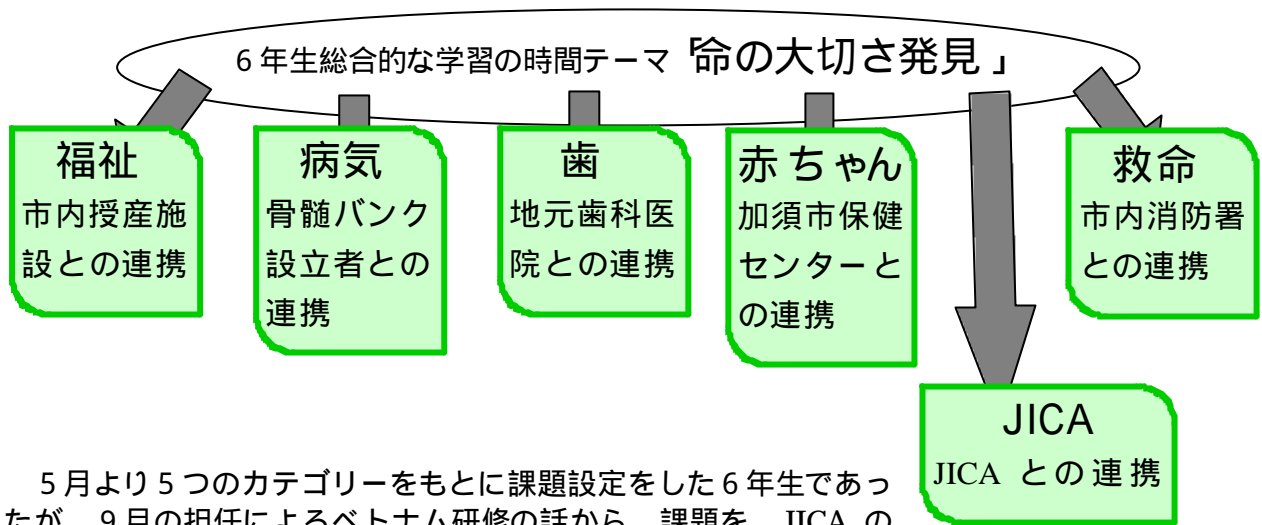
「助け合おうと言っているぼくたちが悪口を言ったりして、本当にできるのだろうか」「助け合う、分け合うなどを言っているぼくたちが、いじめを止められない」といった感想が続発した。



しかし、子どもたちは、よく生きたいという気持ちはしっかりもっている。自分たちの足りないところに気づき、その足りないことをなくしていくことこそが、世界の人々と共に生きることができる近道であることを説話した。

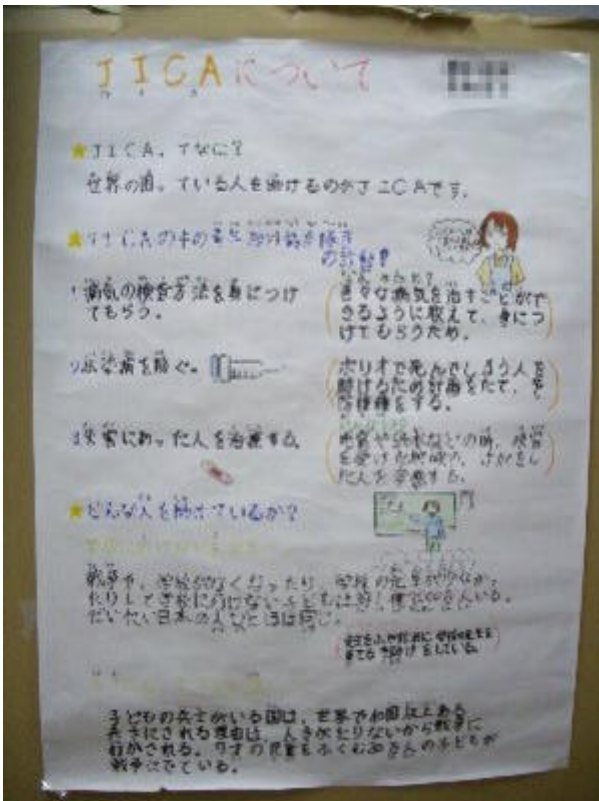
食料をもって飛行機に飛び乗ることはできないが、協力したいこと、助けてあげたいと思うことで、自分にできる募金は、たとえ1円でも大切な「世界の人々と共に生きる」方法の1つであることも右の写真を使って説話に加えた。

(3) 総合的な学習の時間の実践 (6年生4グループ13人)



5月より5つのカテゴリーをもとに課題設定をした6年生であったが、9月の担任によるベトナム研修の話から、課題を、JICAの国際貢献に変更する子どもが13人、4グループできた。ここでは、JICAのゲストティーチャーが担任ということになった。

2学期の調べ活動では、インターネット・担任よりの資料を基に深く追求し、まとめ、1月21日(土)の全校あげての学習発表会「花北ふれあいフェスティバル」で堂々のプレゼンテーションを披露した。



終わりに

今回の研修の体験から授業実践をしたことによって、国際理解教育の充実が学校に不可欠であることをあらためて認識した。英語活動は、国際理解教育の中の1つの領域でしかない。3本柱を意識した学習活動を、今後も展開していきたい。

開発教育という視点から、今回のベトナム研修で、途上国援助の現状を直接目にすることができたことは、教師としても大きな財産となった。JICAの国際貢献をもっと大きく子どもたちに広め、日本が世界の中で、名誉ある国であることを教えていきたい。そのことは、自国に誇りを持つきっかけとなるに違いない。自分にとっては、自国のJICAという組織の活動内容を深く学ぶことができたことの方が大きいことであった。

平成 17 年度教師海外研修（派遣国：ベトナム社会主義共和国）実践報告書

さいたま市立下落合小学校
皮籠石 成久

タイトル：「ベトナムの国を知ろう」

—現地理解教育を日本の子ども達に—

実践教科：社会科、特別活動（時間数：2 時間 10 分）

対象学年：小学校 6 年生・全校児童

対象人数 6 年 2 組児童 31 名、全校児童 547 名

カリキュラム案

(1) 実践の目的

本校は、さいたま新都心に一番近い学校として、国・県の公共機関との連携事業や地域と一体化した防犯活動、確かな学力と学習意欲の形成を強化するための日々の授業実践など特色ある学校づくりを推進している。

特に、国際理解教育については、目標を次のように掲げている。

- 目標 国際理解に基づく、相互敬愛・協力についての認識と実践的態度を培い、国際社会に生きる日本人としての資質を育成する。
 - ・我が国の文化や伝統を尊重する態度を育てる。
 - ・諸外国の文化や歴史を学ぶ。
 - ・相手の立場を理解し、相互に協力・敬愛する実践的態度を育てる。
- つきたい力
 - ・コミュニケーション能力
 - ・豊かな人間関係づくり能力
 - ・国際社会をたくましく生き抜く能力

本校には、母親（父親）が外国人で親が帰化した子どもや、日本以外の国にルーツをもつ子どもが在籍しており、学級単位で親が教室で外国の衣食住などを紹介する機会を設定している。しかし、ベトナム社会主義共和国等、開発途上国を知る機会はなく、書籍やコンピュータでのインターネット上で断片的に情報を得ているにすぎない。今回の教師海外研修で実体験した生の情報を全校児童や教職員に伝える使命感をもち、ベトナムについての正しい理解を深めるための実践を行った。

(2) 授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 時限（6 年 2 組） 「ベトナムの子ども達の生活を知ろう」 自分たちとベトナムの子ども達の生活と比較しながら、同じことや違いを知りそれぞれのよさに気づくことができる。	①事前アンケート集計から子ども達のベトナム観を集約する。 ②ベトナム国の概要説明 ③ベトナムの子ども達の写真を提示し話し合いをする。類似点・相違点等	・アンケート結果 ・ベトナムの本 ・フォー(即席麺) ・ベトナムの少年達の写真

<p>2時限（6年2組） 「私の見てきたベトナム国」</p> <p>子ども達が描いていたベトナム観と教師海外研修で実体験した情報を基に真のベトナム理解を深める。</p>	<p>①ベトナムの地図から日本との位置関係、国土の広さを理解する。 ②ベトナムボックスを基にグループでベトナム観について話し合う。 ③フォトランゲージの手法を用い、視覚的ななどの情報からメッセージを読み取る。 ④グループ毎にまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ベトナム地図 ・ベトナムボックス（民芸品、小物、絵はがき、スナック菓子） ・ベトナムの写真（学校、衣食住）
<p>全校朝会 10分 「ベトナムの国のお話」</p> <p>小学校1年生～6年生、教職員対象に教師海外研修での実体験を紹介しベトナムに興味関心をもたせる。</p>	<p>①ベトナムの広さや位置を説明する。 ②ベトナム国の紹介（学校、遊び、マンガ等）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・世界地図 ・ベトナム地図 ・ダッカウ（足蹴り羽根つき） ・ベトナム語のマンガ（ドラえもん、名探偵コナン）

授業の詳細

1時限

事前に学級担任に、外国に関するアンケート調査を依頼し、外国観及びベトナム観を基に授業を展開した。

質問①「外国のどの国に行きたいか？」

回答①「フランス、アメリカ、イタリア、スイス」などの欧米、言うなれば先進国の回答が多く、「ラオス、ベトナム、ミャンマー」などの開発途上国を回答した児童は皆無であった。

質問②「町で外国人を見かけたらどうするか？」

回答②「言葉が通じれば話しかけてみる」の回答が半数以上で、「見て見ぬふりをする」や「にげる」と回答した児童も数人いた。

質問③「家の人の都合で外国に住まなければならなくなったらどうしますか？」

回答③「進んで行く」「しかたないから行く」が数名、「行きたくない」が半数以上であった。

質問④「ベトナム社会主義共和国という国を知っていますか？どこにありますか？」

回答④「アジア」と回答した児童がほとんどで、「ヨーロッパ」「アフリカ」「南太平洋」と回答した児童も数人いた。

質問⑤「ベトナムの事で知っていることがあったら書いてください」

回答⑤「どんな国か」の回答

- ・とても暑い国。少し貧しい国。日本と戦争をしたことがある国。道路は車よりバイクの方が多。

「食べ物」の回答

- ・生春巻き。フォーがある。カレー。果物が豊富。十分に食べるができない。

「着る物」の回答

- ・民族衣装。タイ風。洋服。ぼろぼろの服。

「住まい」の回答

- ・きれいではない。外に住んでいたり、家がなかったり。粗末な家。

「その他何でも」の回答

- ・昔、ベトナム戦争が起きた。戦争で枯れ葉剤をまいたために体に被害が起き障害のある子どもが生まれてしまったことがある。日本と比べて貧しい。道路はバイクがずらり並んでいる。

以上のような外国観、ベトナム観を抱いている子ども達に、ベトナムについて日本との位置関係を地図上で確認し、日本に出回っている即席麺などの食材を紹介し興味関心をもつようにさせた。ベトナム国を大まかに理解するために日本国内で発行されている書籍物の中で『アジアの子ども』明石書店を活用した。簡潔にまとめられており、児童が概要をつかむ上でとても役だった。

1枚の写真から、ベトナムの子どもたちの表情、生活の様子など類似点、相違点に気づかせる上で効果的であった。

授業後、＜自分がベトナムに行ったら＞という項目で子ども達に記入してもらった中から、以下に記す。

「見たい物」― 一店。家の造り。道路の様子。日本人町。美術品。靴。ボナガールの塔。一柱寺。伝統的なトンホー版画。

「学校」― 好きな教科は。1クラス何人か。給食、お弁当なのか。小学生の様子、児童数。学校の造り。教科書やランドセル。休み時間はあるのか。どんな習い事か。

「食べ物」― フォー以外のベトナム料理の代表的な物は。どのような時にフォーを食べるのか。

「生活」― お金を見たい。シクロに乗ってみたい。ベトナム語を知りたい。ベトナムの正月はあるのか。日本からの製品は、売っているものは。市場に売っている物。1日の生活の様子。朝、昼、夜何を食べているのか。

「ベトナム人」― 大好物は。今流行っている服。民族衣装の生地は、種類は。どのような生活をしているか。どんな遊びがあるか。どんな仕事をしているか。サンダルをはいている人は。伝統工業は。盛んなスポーツは。

「戦争」― 有名な場所は。どんな戦争の歴史があるのか。戦争の被害によって、今でも差別されている人はいるのか。ベトナムは、フランスの支配下におかれたことがあるが、なぜフランスの文化がないのか。

「対日感情」― 日本をどう思っているのか。

このように子ども達は、思っていた以上に、ベトナムの国について関心を示し、ベトナム教師海外研修の課題として、情報や資料収集の視点が定められた。「とても面白い授業で、ベトナムに行きたいと思いました」との児童の感想にもあり期待を裏切らないように心を強くして、帰国後の授業開発に力をいれた。

2 時限

ベトナム最新情報を、子ども達に知らせる事を第1に考え、資料収集してきたものをベトナムボックスの中に入れ、活用しやすいようにした。ベトナムの地図は、面積や南北に長い地理関係を知る上で効果的であった。民芸品や生活の様子が分かる小物は、子ども達から集約したアンケートに視点を定めていたので、授業展開に大いに役立てた。現地で撮った写真を拡大しフोटランゲージの手法を用いて、視覚的な情報としてグループごとに配り、話し合い活動が活発になった。



ベトナムの小学校の教科書

＜各グループのまとめと、感想＞

- ・日本に比べると技術がやや遅れている感じがした。食べ物の値段は日本より、かなり安い物や、あまり値段が変わらないものもあった。
- ・木琴の音が、日本の音と似ていた。シクロの模型がかっこよかった。スナック菓子は、ウエハースが美味しく日本と同じ味だった。ベトナムの漫画やお菓子などは、すごく安いと思う。
- ・ベトナムのかっぱえびせんの味は、日本の味とちがって美味しいのと、美味しくないのがあった。日本より物価が安



タンディン村の小学校の子どもたち

い。ドラえもののマンガ、カラーで見やすかった。ベトナムのお金の単位が「ドン」と読むのにびっくりした。枯れ葉剤で病気になった人がかわいそう戦争は恐ろしいと思う。

- ・蓮の実のお菓子の味、ジャスミンの香りがして、ちょっと変わった味でした。技術は日本より進んでいないが、日本からの技術援助や経済援助のおかげで、技術の進歩がのびてきたことが分かった。ベトナム人形の服は日本とちがってアオザイの衣装でした。
- ・日本と同じかっぱえびせん、塩味で美味しかった。木琴の音色、心に響いた。ベトナムボックスの写真や、民芸品などで、ベトナムの文化がよく分かった。
- ・食べ物（クッキー、かっぱえびせん）美味しくて、ベトナムの子ども達も同じお菓子を食べていることを思うと親しみがわきました。トンホー版画すばらしかった。（図と色合い）



枯れ葉剤の後遺症で
リハビリ中の子ども

全校朝会 10分

「シン チャオ」ベトナム語で「今日は」の意味です。教頭先生が、この夏休みに、勉強で出かけたベトナムの国のお話をします。

- ・ベトナムという国は、南北に細長く S 字型をしている国です (1600km)。
- ・人口は約 8200 万人です。
- ・とても暑い国で、年間の平均気温が 25℃～26℃です。
- ・農業がとても盛んでお米の生産量は世界 5 位です。このような笠をかぶって作業をしています。
- ・暑い国ですので朝早くから授業がはじまります。6時40分に登校、6時50分に始まる学校もあります。
- ・ベトナムの国の子供達の子供達の好きな遊びは、ゴム跳び、かくれんぼ、サッカーの順です「ダ・カウ」という足で蹴る遊びも盛んです。
- ・国はとても豊かとは、言えない国ですが、子供達は、とても勉強熱心で、家のお手伝いもよくしています。また、明るい表情をした子供達がたくさんいます。
- ・最後に、皆さんの大好きな漫画の「ドラえもん」「名探偵コナン」のベトナム語の本と「かっぱえびせん」を紹介して終わりにします。そして、いつか皆さんも外国へ行って見たり、聞いたり、その国の料理を食べたりする等沢山の経験をして欲しいと思います。

このような話を、9月6日（火）の全校朝会でお話した。



全校朝会で
ベトナムのお話



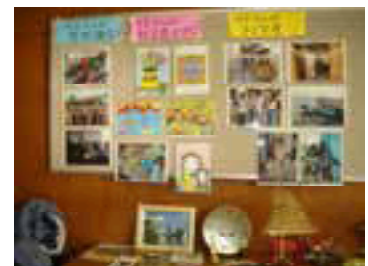
底抜けに明るい表情の
子ども達

<児童の感想>

- ・日本のマンガがベトナムでも人気があることが分かりました。
- ・「ダッ・カウ」の遊び、やって見たいと思いました。
- ・ベトナムの「かっぱえびせん」食べたいと思いました。
- ・朝早くに学校が始まるのには、びっくりしました。
- ・ベトナムの子ども達もサッカーが好きな子がいるようなので、一緒にやって見たいと思いました。

1年生から6年生まで学年差はあっても、同じような感想を持った児童が多数いたようだ。

ベトナムボックスの絵や民芸品、写真など展示したり、手に触れて楽器を奏でたりできる、ベトナムコーナーを設置し、ベトナムが身近に感じられる工夫をした。



成果と課題

「夏休み僕の家族もベトナムに旅行で出かけてました」という5年生の男の子から、私に報告があった。職員室でお話を聞くと、両親がベトナムが大好きで、毎年のように出かけていると、写真も持参し、今回はホーチミンを中心に回り、フォーが大好きだと得意げに、語ってくれた。私は、お礼にチルドレンズパレスで頂いたバッチと絵手紙のコピーを彼にあげた。同時期にベトナムの地に居たことに共感的理解を見いだしたと思う。

6年生のクラスでは、7月に「ベトナムの国の子ども達の生活を知ろう」でベトナム国への課題意識を持たせ、帰国後の9月に「私の見てきたベトナム国」の授業を通して、現地理解教育(生活、気候風土、歴史、子ども達の学校での様子)が図られたと思う。教師海外研修で得た生の情報は、6年生の子ども達にとって、とても新鮮であり、真のベトナム理解を深めるきっかけになったと思う。ベトナムボックスは、とても有効であると考えている。

この実践を通して、1人でも2人でも、世界で活躍できる人間になって欲しいと考える。

課題として、学級担任を持っていないので、日々の授業のなかで、ベトナムを意識した授業展開ができないのは、残念である。また、国際協力の現場である、JICA事業や、開発途上国での現状を把握させ、開発教育等に役立てること。6年生の子ども達が卒業するまでに、青年海外協力隊のOBを招聘し、授業を展開したいと思う。

今回、埼玉県、千葉県から、14名がベトナムに行く機会を持ち、海外研修参加者の相互の人間関係を深める事ができたことは、大きな財産になった。①世界の国々には、様々な国の人々が一生懸命生きて生活している事、②日本人たちが、海外のいろいろな地域(国)で活躍している事、③教師自身が、グローバルな生き方ができるような気持ちになった事、など子ども達に伝えていきたいと思う。

今回の研修で得た成果を、JICA 東京、埼玉、千葉のネットワークを生かし、後に続く後輩達への指導の場を埼玉県内に限らず、関東全域に展開していきたい。

参考資料

<社会人へ向けての実践>

NGOネット ミニ学習「ベトナム教師海外研修報告」より



ベトナムで購入した地図で位置を確認



大島幸氏制作のパワーポイントで
参加型学習を行う



ベトナム現地理解を絵手紙で紹介



報告書を基に説明

<参考文献>

- ・『アジアの子ども』（発行者：石井 昭男、発行所：明石書店、
編者：(財)アジア保健研修財団「アジアのこども」編集委員会)
- ・『ベトナムの子どもたち』（指導：西村 佐二、発行人：伊藤 年一、
編集人：安西 剛、発行所：(株)学習研究社)